

Title	唇・顎・口蓋裂乳幼児（裂型別）の上顎骨歯槽部の成長発育に関する研究
Author(s)	溝川, 信子
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/33184">https://hdl.handle.net/11094/33184</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	溝 川 信 子
学位の種類	歯 学 博 士
学位記番号	第 5 5 5 4 号
学位授与の日付	昭和 57 年 3 月 6 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	唇・顎・口蓋裂乳幼児(裂型別)の上顎骨歯槽部の成長発育に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 宮崎 正 (副査) 教授 赤井三千男 教授 作田 正義 講師 吉田 建美 講師 大嶋 隆

### 論 文 内 容 の 要 旨

唇・顎・口蓋裂患者では、特に中顔面部の成長発育障害が特徴的であるが、この基盤をなす上顎骨の成長発育障害およびこれに起因する咬合異常は、すでに乳幼児期において認められる。これらの障害は、主として唇裂、口蓋裂手術後にみられる上顎骨歯槽部の偏位・転位によるものとされているが、顎裂のない口蓋裂単独症例においてもそれらの障害を呈する症例をみることがある。すなわち、唇・顎・口蓋裂における上顎骨の成長発育障害が、歯槽部での位置的变化のみならず、上顎骨の全体的成長発育に関連して発現しており、しかも裂型の相違によって差異を示すことが考えられる。このことを明らかにするためには、異なる裂型を有する上顎骨歯槽部の成長発育変化の動向を、立体的に追求し、分析・把握することが望まれる。本研究は、乳幼児期における唇・顎・口蓋裂の各破裂型について、上顎骨歯槽部の成長発育を三次元的に分析し、裂型の相違による成長発育様相と障害部位を明らかにすることを目的としたものである。

被検者は、本学部附属病院口腔外科および顎口腔機能治療部を受診した唇・顎・口蓋裂患者のうち 118 例を裂型別に、片側性完全唇顎口蓋裂、両側性完全唇顎口蓋裂、口蓋裂単独症例の三裂型群(以下、それぞれ片側性群、両側性群、口蓋裂単独群とする)に分類した。さらにこれらは、手術時期、月令、体重等を考慮し、stage 1;唇裂手術直前(4.5~5.5ヶ月)、stage 2;口蓋裂手術直前(18~20ヶ月)、stage 3;ほぼ4才時の3段階に区分し比較検討した。

研究方法は、各被検者より採取した乳幼児顎顔面模型を資料として用い、計測を行なった。同模型は顔面と口腔の形態を一個の模型上に表現し、顔面頭蓋部を基準にして歯槽部の形態を深さ(前方発育)、高さ(下方発育)、巾径(側方発育)の三次元において分析しようとしたものである。計測点は

上顔面部，歯槽部に左右9点を設定し，これにより構成された11項目につき各裂型群間および各裂型群と正常対照群の比較検討を行なった。測定結果の有意性の検定は，t-検定を用い有意水準5%とした。結果は以下のように要約される。

1. stage 1における片側性および両側性群の比較では，特に前方歯槽部において著明な差異を認めた。すなわち前方歯槽部巾径では片側性群が，I.点の深さでは両側性群がそれぞれ大きい値を示した。各歯槽計測点の高さおよび後方歯槽部における各次元の成長発育では，両群はほとんど差異を示さなかった。

2. stage 2における片側性，両側性および口蓋裂単独群の三裂型群間の比較では，口蓋裂単独群の後方歯槽部巾径（後臼歯点間距離）が他の二裂型群に比較してやや小さい傾向を示した以外は，各次元でほとんど差異は認められなかった。

3. stage 3における三裂型群間の比較では，特に片側性群と両側性群間に著しい差異を認めた。すなわち歯槽計測点の深さでは両側性群は片側性群より大きい値を示し，高さでは逆に小さい値を示した。口蓋裂単独群における各歯槽計測点の深さ，高さでの成長発育は，片側性群および両側性群のほぼ中間位にあった。

4. stage 3における三裂型群と正常対照群との比較では，各裂型群は対照群に対し各次元で小さい傾向を示し，特に前方歯槽部で著明であった。すなわち片側性群では深さ，巾径，両側性群では高さ，巾径において，口蓋裂単独群では深さ，高さ，巾径のすべてに著明な成長発育障害を示した。

以上，乳幼児期における唇・顎・口蓋裂患者の上顎骨歯槽部は，裂型の相違によって深さ，高さ，巾径の各次元にそれぞれ特徴ある成長発育を示した。その成長発育障害は歯槽部全体に及んでいるが，特に前方歯槽部において著明であった。そしてこれらの障害を惹起する要因は，歯槽部自体の偏位・転位であると考えられるが，さらにこれにつながる鼻上顎複合体の構成とその成長発育にも問題のあることが示唆された。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は，乳幼児期における唇・顎・口蓋裂の上顎骨歯槽部の成長発育を各破裂型別に追求し，研究したものである。

被検者は，片側性完全唇顎口蓋裂群45名，両側性完全唇顎口蓋裂群43名，口蓋裂単独群30名および正常群10名である。被検者より採取された乳幼児顎顔面模型上で，上顎骨歯槽部の成長発育変化を三次元的に分析し，比較検討している。その結果，従来ほとんど知られていなかった乳幼児期における唇・顎・口蓋裂の上顎骨歯槽部の成長発育障害と，その裂型別特徴について，重要で価値ある知見を得ている。

よって，本研究者は，歯学博士の学位をとる資格があると認める。